碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可

神奈川　碩心会　発行

元年6月号（203号）

発行者　根岸岳萃

編集者　中村愛岳

現在会員数	
元年6月	
逗子地区	167名
葉山地区	260名
大船地区	49名
（合計）	（476名）

詩吟との出会い

下山口支部　沼田静風

昭和四十七年一月、沼田義久（義岳）さんの呼びかけで入会、吟道典を手に気持が張りました。根岸岳萃先生、加藤岳相先生、沼田洸岳先生、先輩の方々の指導を戴き、早や十七年を経過、今日に至りました。吟道手帳は歴史の賜ものです。其の間、祖宗範木村岳風先生の墓前にも拝することが出来、感無量でした。

詩は魂のふるさとであり、感情の泉だと思います。折に触れ、時に応じ朗誦吟詠するとき、おのずと心を正し、典雅な情操が育成されます。朝目がさめると又今日も生を与えられた喜びに感謝し、新しい希望に輝きます。

私は又、格調高い詩舞を舞う姿にも心から感動させられます。詩舞に見入り、我に返った時には、詩の心に深く入りこんで見入っている私でした。

昭和天皇が崩御され、平成元年となりました。この期に益々奮起して吟道に励みたいと思います。今後共よろしくお願いします。岳風会の益々の発展を心からお祈りします。

平成元年度　碩心会理事会議事録

日時・平成元年六月一日(木)午後七時より

場所・逗子市桜山下会館

加藤常任理事の司会にて、定刻、小峯副会長の開会の辞により開会、竹石常任理事の指揮で「碩心会の詩」を合吟、つづいて根岸会長及び三井相談役の挨拶があり議事に入った。

（正・副議長並びに書記任命）

司会者一任により、議長に根岸会長、副議長に加藤・小峯両副会長が任命され、書記に宇都宮本部理事が任命された。

（議　事）

(一)昭和六十三年度決算報告並びに会計監査報告承認の件

◇秋元会計部長より報告あり、井沢監査役から適正であるとの報告あり承認される。

◇又特別会計として積立金は預金利息を併せ五四万四、二五〇円に達している旨の報告あり、了承された。

(二)平成元年度予算(案)承認の件

◇秋元会計部長より別紙プリントにより説明あり、承認される。

(三)報告並びに連絡事項

葉山地区長　沼田洸岳

◇昨年11月27日葉山地区温習会が皆さんの協力により無事盛会に終った事に対し御礼。

逗子地区長　千葉劒岳

◇桜山B支部が解散、現在九支部167名に減少、新入会員獲得の増員運動に努力中。

◇9月17日の県大会の動員、7月の夏期講習会への出席を取りまとめている。

◇逗子地区温習会は12月3日又は10日を予定している。

大船地区長　森田暁岳

◇大きな変化はないが、新規入会者に若い人が確保出来ず苦労している。

総務部長　加藤圭岳

◇神・静地区青少年吟道大会への出吟に協力を願いたい。

◇9月17日35周年県大会への出吟及び動員は左記の通りに付協力をお願い。

独吟　葉山(1)　逗子・大船(1)

合吟　葉山(2)　逗子・大船(1)

コンクール　葉山(1)　逗子・大船(1)

動員数　葉山102　逗子65　大船20＝187

出吟料　七百円　6月18日迄に。

◇バッヂ（千円）、ネクタイ（二千五百円）の在庫があるので新規入会者は勿論、古い会員も更新の為申込まれたい。

許証部長　中村幸岳

◇昇段審査及び講習が次の通り実施された。

2/19八段審査　2/26皆伝・九段・十段審査

3/26碩心会審査　2/29師範講習　3/12正師範講習

◇秋季審査会は9月24日(日)に決定

◇許証料にも消費税が課せられ、その金額は「碩心」五月号に携載してある。

教務部長　竹石憲岳

◇7/29～7/30夏期講習料は今年から八千円に。

◇初伝以上申込みが出来るので6月5日迄に申込みを。定員オーバーの時は抽選。

◇8/6県本部主催指導者講習会が防衛大学で実施される。

◇教本の取扱いは広瀬本部理事が病気の為松井正風本部理事が引継いでいる。

◇愛吟集（五一五円）及び審査課題集（二〇〇円）御希望の方は申し込みを。

企画部長　千葉香岳

◇36/18日に第13回碩心会温習会を開催。12/10日又は12/14日に逗子地区温習会、来年1/21日又は1/28日に初吟会開催を予定。

◇初吟会当番支部は滝の坂、上原、一色B、唐木山。

広報部長　中村愛岳

◇報告、連絡事項等「碩心」に掲載するので配布洩れのない様に。

◇詩吟に関連する記事の投稿をお願い。

会計部長　秋元梁岳

◇総本部費、県本部費はその納入時期を勘案して、指導者講習会、温習会等を納入時期にしているが、当日は忙がしいので釣銭のない様準備して下さい。

◇現在総本部一回、県本部二回、碩心会二回と五回の徴収となっているが、できれば三者をまとめて年二回の徴収に簡素化することを考慮中である。

(四)其の他（会員増加の件）

会長　根岸岳萃

会員の減少事態に関し、その対策として最も大切なことは各支部長はじめ会員が、和を以って団結すると共に、各会員が会員増加に協力して頂くことにあると思う。マンネリ打開策、或は当会へ活を入れるアイディアをどしどし提案してほしい。私としては現在42名の指導者を50～60名位に増加して、きめの細かい会員獲得強化を進めたいと考えているので協力願いたい。

副会長　加藤岳相

今後の最大努力事項として新規会員獲得の具体策を考えてゆきたいので皆さんの協力を願います。

相談役　三井岳墟

会員増加策として、現在会場の確保は困難であるが、個人の家でもある程度防音効

果がある部屋があって、二名でも三名でも希望者があれば、指導者を派遣する様にするので申し出られたい。

以上を以って議事終了、議長及び書記の解任、最後に加藤副会長の閉会の辞にて八時五十分理事会終了した。　宇都宮徳風記

広報部の仕事

広報部長　中村愛岳

（原稿あつめ）

毎月四頁の残面を埋める原稿がないとまとまりません。この誌上からもお願いしておりますが、集まらない時には電話等で直接依頼することもあります。

（お知らせ記事等について）

予定事業、決算報告等はいち早く報告するのが広報部の役目です。そのため碩心会の内部事情を詳細に掌握しなければならず、各部との関連が必要です。その他碩心会に関係ある県本部事業、総本部事業の報告にも気を配ります。

（集まった原稿のレイアウト）

四頁におさめるため、長さをつめる、起承転結を建前に文章の前後をかえたり、読みやすくするため、、や。を入れたり、誤字の訂正等をしますが、あくまでも本文を損なわないようにということが、苦労するところです。

（下刷＝校正＝本刷＝お手許へ）

出来上った下書を印刷屋さんへ。そして下刷により校正して再び印刷屋さんへ。そうして刷り上った月報は地区長さんから支部へ、そして皆様のお手許に渡ります。

副部長の岩崎恵岳、上村象岳先生には原稿集め等協力していただいています。

八聖殿行

逗子A支部　草柳武泉

日は浪より昇りて又波に沈む
海水洋々として紫色多し
鵬影飛ばず餓躍らず
碧空万里白雲過ぐ

眼下に日石のタンク群が並び、その先方に東京湾の海面が光って見える、此処本牧の、松と桜の林の中から、明らかに錬達の士の交った、見事な男女十四、五名の合吟が湧き起った。

軽燕軒先をかすめる六月四日(日)快晴で爽やかな風の吹き通る、八聖殿横の台地からであります。七、八十段ある石段を登り切って少し息を整えてから、場所に因んで、八聖殿を創立された安達漢城作の「太平洋」を根岸先生の先導で合吟しているのです。正規の詩吟を学んでいる喜こびを嚙みしめ乍ら吟じ終る。

つづいて正門近くにある石碑を見る。これは木村岳風先生を慕う一行が、御存命中の地位を目のあたりに見る事が出来るのです。日本有数の詩吟の先生方のお名前が刻まれた中に、彫りもひときわ深く感じられるお名前があるのです。約五十年前の建立で、組織成った近代詩吟の発祥の碑と聞いております。

ふりかえると松林に囲まれて、八聖殿がシーンと静まって建っております。一歩中にふみこんだ時、正面一杯に、身長二米余の八人の聖人の立像に圧倒されます。右より日蓮、親鸞、弘法大師、聖徳太子、釈迦、孔子、ソクラテス、キリストで、即ち八聖殿の由来は、ここにあるわけです。

その昔、私はこの八聖殿での、全日本各宗家の吟詠大会に、司会を務める渡辺緑村先生のカバン持として出席出来たのでありました。挨拶に立たれた安達氏は小柄で、かなり猫背で、眼光が異常な程鋭い風貌も思い出しました。又岩淵神風氏が「蒙古来」をガラスがビリビリする位の声で吟じられたその声が耳にひびいてくる様に思いまし

た。当時私は十六才、吟歴も一年位でした。我にかえって正に歳月芒々四十七年の感でありました。

つづいて徒歩で三溪園へ。花菖蒲の見頃で画架に取り組む人、写真を撮る人々の姿あり、売店の折詰寿司にありつき、バラの見事な山下公園へ。赤い靴の人形像を見に行く人、巨大で優美なクイーンエリザベス号等みて、有意義な清遊の一日を終りました。

練吟メモ

二つの絶唱

○　江南の春　杜牧

千里鶯啼いて緑紅に映ず
水村山郭酒旗の風
南朝四百八十寺
多少の楼台煙雨の中

揚子江下流南部一帯のすばらしい春景。前半は広く明るい晴天の農村風景であり、後半は落ちついた平和な雨の古都の情景を完璧に描写している。中国では、自然を詠じた詩は多いが、これは江南の春を歌った詩中の絶唱とされている。口調よく、日本においても最高に愛唱されて来た。

○　涼州詞

葡萄の美酒夜光の杯
飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す
酔うて沙場に臥す君笑うことなかれ
古来征戦幾人か回る

戦場でつかの間の歓楽に酔いしれる兵士の姿をうたった詩。前半で遠く離れた辺地での酒宴、傍の馬上で琵琶をかきならす者がいる。後半は、砂漠の戦場での兵士の酔態を笑わないで欲しい、いったいこのうち何人が故郷へかえれるか。詩の構成と言い内容と言い、まさに唐代七絶中の第一に数うべき傑作とされている。

○この二詩をなんであえてここに持ち出したのか。これほどの有名かつ口調のよろしい詩が、どうしてわれわれの吟道大会に、ほとんど吟じられないのであろうか、という素朴な疑問からである。要するに、なぜ吟題にすることが敬遠されるかを分析してみたいからである。試みに小さい声でよろしい、ここでこの二詩を吟じてみていただきたい。二詩とも必ず転句の余韻で、わずかであるがためらいを感ずることと思う。というのは、この二詩は、そろって転句の吟じ方の一部に、他の詩とは少々異なる調子のところがあるからである。

○筆者は、岳風祖宗範のテープや、総本部発行の吟詠教本テープでこの二詩の吟詠を聴いてみて、現教本の符付けどおりである

と思った。教本の符を基準とすれば、吟詠の節調に混乱を生ずるはずはない。もちろん、詩意の表現上の差違はあろうが、それは当然のはなしで問題でない。端的に言えば、指導層が独善的な半音や節廻しを使用することによって下部に混乱が生ずるということである。ことに教場が分散している現状においては、避けられない現象かも知れない。それもこれも、音符にない節調を用いることが原因となっているようである。

短歌

風早支部　長島玉岳

厳かに館静まり記帳しゆく
御代の別れに胸濡らしつつ
幼等は一日生命を燃やししか
それぞれ寝息健やかにたつ

（移籍）

131 西山隆風・平松支部より滝の坂支部へ
419 森谷美泉・平松支部より堀内支部Dへ

（退会）

179 加藤修風（平　松）
274 吉田芳山（平　松）
280 行谷隆山（平　松）
270 斉藤昌山（平　松）
293 斉藤成山（平　松）
314 風戸廣山（平　松）
333 大川清山（平　松）
389 中村酔山（平　松）
391 堀内秀山（平　松）
421 本橋春泉（平　松）
460 池田修二（平　松）
473 藤崎良司（松　和）
477 桐岡ハル（平　松）